

鈴木棠三

語源散策

相合傘



語源散

江苏工业学院图书馆
藏書章

木葉二

創拓社

鈴木棠三 すずき・とうぞう

一九一一年生まれ。清水の人。国文学者・民俗学者。一九三四年国学院大学国文科卒業、一九三七年国学院大学研究科修了。折口信夫・柳田国男らの薫陶を受ける。民俗学的視点から、とりわけ近世の文学を読みとき、注目を浴びる。諺言や地口、洒落の研究の第一人者。

主著に、『なぞの研究』『ことは遊び辞典』『故事ことわざ辞典』（正統）『類語辞典』『俳説ことわざ辞典』『ことば遊び』『日本年中行事辞典』『日本俗信辞典』など多数。

©Tōzō Suzuki

語源散策・相合い傘

一九九〇年七月二十七日 第一刷発行

著者 鈴木棠三

発行者 井吹 晋

発行所 株式会社創拓社

東京都千代田区神田神保町一三六
稲岡九段ビル六階 〒一〇一

TEL 〇三・二八八・七二〇〇
FAX 〇三・二八八・七二六四

振替 東京七―五八五五〇

装幀者 杉浦康平・赤崎正

印刷・製本 株式会社加藤文明社印刷所

本文用紙 三菱製紙株式会社

力、落丁・乱丁の場合はお取替いたします。

ISBN4-87138-100-5 C0095

1990, printed in Japan

語源散策・相合い傘 目次

目次

相合い傘	九
阿茶 あちゃ	一三
後釜 あとがま	一四
あどけない	一五
姉子天気	一六
あへんど	一六
いくまる	一七
一張羅 いっちょうら	一七
いとさん	一八
嘶く いななく	一八
軒 いびき	一八
うざねはく	一九
失う	二〇

宇治丸	二二
海老屋甚九郎	二五
美味しい	二六
おいど	二七
御壁 おかへ	二七
おだ	二七
おたんちん	二七
……おち	二七
おっかなびっくり	二七
お転婆	二七
御袋 おふくろ	二七
重湯 おもゆ	二七
思惑	二七

3 目 次

おんでもない	六
敵	九
金氷 かなこおり	二
螳螂 かまきり	三
かまける	五
かんぼう倒れ	六
雁擬き がんもどき	九
紀国	七
気の毒	七
擦ったい くすぐったい	七
草臥れる くだひれる	七
希代 けたい	六
間水 けんすい	八
豪様	八
瞽女 ごぜ	八
こせ言	四

諺	六
ごねる	九
誤魔化す	三
さめざめ	四
しくじる	五
自期 じこ	七
痺れ	九
車軸る しゃじくる	一〇
冗談	一三
丈六 しょうろく	一四
吝い しわい	一六
しんどい	一八
随分	二一
荒び食い すきひくい	二三
寿司	二五
鋭い	二九

ずぼら 一三

倅 一三

せしめる 一三

雪隠大工 一五

世話 一七

造作もない 一三

ぞつき 一三

尊丈そこら 一四

譬 たとえ 一六

魂 たましん 一九

駄目 一四

だらしない 一四

力飯 ちからいい 一四

ちくら 一五

茶化す 一七

ちゃっかり 一九

茶の子 一五

ちよっかい 一五

序で 一五

燕合わせ つばめあわせ 一五

つべこべ 一七

連れ 一八

体たらく 一六

出鱈目 てたらめ 一六

手の窪 てのくぼ 一六

出振舞い でぶるまい 一五

照れる 一七

胴欲 どうよく 一六

十千万 とちまん 一七

とと 一七

怒鳴る 一四

尚更 なおさら 一七

なじよな	二七
匂い	二九
握り屋	二八
貫き手	二八
ねまる	二五
のすかい	二九
呑気	二九
計	二九
はちきれる	二六
腹ぺこ	二七
ひいひいたもれ	二六
彼岸花	二九
ひとねる	二九
河豚ふぐ	二五
不届き	二七
不憫ふびん	二九

風呂	三一
へへ	二五
吠える	二七
布袋腹 ほてっばら	二八
曲げる	二〇
待ち針	二三
俎 まないた	二三
真間 まま	二五
丑巴 まんじともえ	二六
まんま	二九
三日月	二三
身慎莫 みじんまく	二四
味噌っ滓 みそっかす	二七
向かつ腹	二九
胸倉 むなくら	二四
名目	二四

眼鏡……………二五

雌……………二四

面倒……………二四

猛に……………二五

もしもし……………二五

舫い もやい……………二五

益体 やくたい……………二六

やっさもっさ……………二六

矢張……………二六

結納……………二六

夕暮れ……………二六

羊頭 ようず……………二六

欲張る……………二七

涎掛け よだれかけ……………二七

四方……………二七

埒 うち……………二七

料る りようる……………二八

老僧 (老叟) ろうそう……………二八

陸でなし……………二八

分け……………二八

わちき……………二八

割り勘……………二九

わんわん……………二九

語源散策・相合傘

鈴木棠三

相合い傘

あいあいがさ

昔は、お医者さんへの薬取りには奉公人や小僧が行くものと相場が決まっていた。医師の調剤が暇取るので、時間を持て余した彼らが、近所の塀や壁に落書きをする。相合い傘はその代表的なもので、傘の下に柄を中にして男女の名を書く。別段、浮名の高い御兩人とは限らない。出まかせに近所の娘と若者の名を書き込むこともある。好一對の見立てのつもりでも、本人たちにとっては、その前を通れないくらいな打撃を受ける。便所の中も代表的な落書き地帯だが、相合い傘は少ない。こんなものでは刺激が少なすぎるためだろうか。昔も今も、一人で閉じこもるような場所では社会的効果は少ない。通りがかりに見えるから効果があるわけだ。

さて、アイアイガサの落書きについて、『俳諧通言』はいかいつうげん（文化四年刊）に説明が出ている。相合い傘は、女郎や芸子とその色男の二人の名を傘の下に並べて書く。これは傍輩ほうはいの女たちのいたずらで、こうして冷やかすのだとある。『俳諧通言』は俳諧の用語を集めた本とはいいながら、実は売色関係のことばかりあげたものであるから、相合い傘も花街かがいの風俗として解説されている。けれども、これが色街いろまちで発生した風俗ということにはなるまい

と思う。とにかく相合い傘に人氣があつたことは、天保ごろから幕末にかけて相合い傘何々と題する芝居が数回上演されている事実からしても明らかである。

アイアイガサは、一本の傘を男女でさすことだと、『大辞典』（平凡社版）に説明してあるが、男女とすることには疑問がある。その方が色っぽいが、男女とは限らない。合愛奇愛（愛縁奇縁）などの語感から影響された説かも知れない。アイアイはモヤイ、すなわち共同、共有ということで、傘に限らず、いろいろなことばに、自由に冠して使つたものである。

その一例に狂言『相合烏帽子』がある。もともと能狂言の成立年代は、演目によって時代が一樣でなく、中には江戸期に入ってから作られたものもあるが、この『相合烏帽子』は、室町時代の作とされている。丹波と丹後の農民が、正月の飾り松と飾り竹を持って京の地頭の館へ来て、褒美に烏帽子をもらう。兩人舞立ちにしようと思ひが一致したが、烏帽子は二人に一つしかない。そこで烏帽子の台もろともに二人の頭の上にのせ、歌とともに舞立ちになる。歌の文句の終わりに「相合着てこそ帰りけれ」とある。相合いで着ての意味である。

また、『相合袴』という狂言もある。聲が決まったが、貧乏な聲で袴の持ち合わせがないので、仲人と二人で一つの袴に片足ずつ入れて、舅方に行く。舅もこれに合わせて、

冠者^{かじや}と兩人一つ袴に片足ずつ入れて応対するといふものである。こんな滑稽な相合いの仕方もありえたわけであろうか。

アイアイ牛ということもある。二人で一頭の牛を共有するのいい、舅と舅で持つ場合の例が多い。舅はむっとするほど可愛いということわざもあるから、舅舅の共有にはトラブルが少なかつたろう。その外、相合い駕籠^{かこ}、相合い櫛^{くし}、相合い炬燵^{こたつ}、相合い煙管^{きせる}、相合い布団^{ふたん}、相合い下駄^{げた}、相合い行灯^{あんどん}、相合い硯^{すずり}など、自由に相合いを冠している。くしやきせる、ふとん、こたつなどは、色っぽい情景を連想させる。

相合い傘を相傘ともいう。相合い駕籠に相当する相輿^{あいこし}も同じで、この類には相商^{あいあきなひ}（双方ともに商売にすること）、相棒、相肩、相乗りなど少なくない。

勝負なしのことをふつうアイコというが、滋賀県の一部ではアイコは共有の意味である。奈良県ではこれをアヤコという。また、アイヤコスル（共有する）という郡もある。これらはアイアイコのなまりである。相合いをアイヤイとなまることは、「三人してあいやいに借り切たると見へて」（『魂胆色遊懷男』。三人で一艘^{そう}の舟を借り切りにすることを述べたくだり）とある例でも明らかである。アヤコはアイアイコのなまり、近江^{おうみ}のアイコはアイアイコの省略形である。

阿茶

あちゃ

中世の記録には、阿茶と名の付く婦人が実に多い。やや新しいところでは、徳川家康の側室阿茶局あちやのつばねがある。今川の家臣神尾忠重の妻で、寡婦かふになつていたのを家康に仕えたもので、利口な婦人だつた証拠に、大坂の陣の際、東西の和議を成立させる立役者となつた。その時会見した相手の淀君よどぎみも、名は茶々である。茶々はお茶々すなわち阿茶々で、同じ名である。

中国では阿茶は尊い名で、天子の娘を称する名であつた。阿茶は阿茶子を省略したもので、阿は助辞、茶子は宅家子をつめて発音したものだといふ。宅家子とは、天子が天下を宅とし四海を家とするとから、その娘を宅家子と称したものだとも、また古く大家子と美称したのを宅家子になまつたのだともいふ。「上を習う下しも」ということわざは、どこに行つても同じことで、中国では尊い名の阿茶をしだいに市民の間でも使うようになった。わが国では、貴族の召し使い、青女房（年若い、官位の低い女官）などと称するものに阿茶が多い。

前田利家の娘で、後に豊臣秀吉の側室となり加賀殿と呼ばれたまあ姫は、少女の時、柴

田勝家のもとへ人質に出されていた。北庄落城の時、このまあ姫を機転をもって助け出したのは、侍女の阿茶子という婦人であった。中国では阿茶子が正しい言い方だったが、日本の阿茶子はそんな故事に基づくわけではなく、女性の名だから、習慣どおり下に子を付けたというだけであろう。

漫才の故花菱アチャコは、いわば烈婦、賢婦から愚婦、凡婦までさまざまの先祖を持っていたことになる。

なお、アチャから変化した名に、イチャというのもある。「科をばいちやが負ひまらしよ」と慶長年間の『女歌舞伎踊歌』にある。上流の家庭の娘には、屁負比丘尼とか科負比丘尼くになと称する介添役かいそえの老女がついていた。お姫さまがおならを落とすようなことがあれば、婦徳に欠けたしくじりだということで、その時は、この老女が「わたしとした事が」とか何とか、自分の失敗のようにして取りつくろう。それで屁負比丘尼という。「科をばイチャが負う」も似たようなケースだが、イチャは老女ではなく、お乳ち、守役、端女はしためなどの通名で、坊ちゃんや嬢ちゃんのいたずらの尻ぬぐい役に、イチャが叱られてすますということである。

後釜

あとがま

アトガマに座るのアトガマは、後任ということである。なぜ、人が辞めたあとの地位をアトガマというのか、また、いつごろから使われたことばなのかよくわかっていない。

『大言海』の説では、後構あとがまえの略された形であろうとする。カケクラベ（駆け競べ）がカケクラになるのと同じ変化だという説であるが、それだと戦国時代のことばみたいである。このことばはそんなに古くはないはずである。

これとは別に、カマに特殊な内容を持たせる考え方も成り立つ。『浮世風呂』に「へへへ、それはこつちのかまには、ちと遠通えんつうじ」とある。遠通じは、耳が遠くてよく聞こえないのをいったしやれで、単に通じないという意味にも使われたのである。江戸の人は、逃げるのを随徳寺、金一分を長徳寺など、寺の名めかしているのをしやれとした。遠通寺もその一つである。

右の場合のカマは、流儀とかやり方という意味であることは明らかだが、なぜこれをカマといったかが問題である。それがわかれば、アトガマのカマも明らかになるかも知れない。